

杜乃杵

秩父神社社報
杵乃杜(ははそのもり)

第 21 号

平成12年7月20日
(川瀬祭)



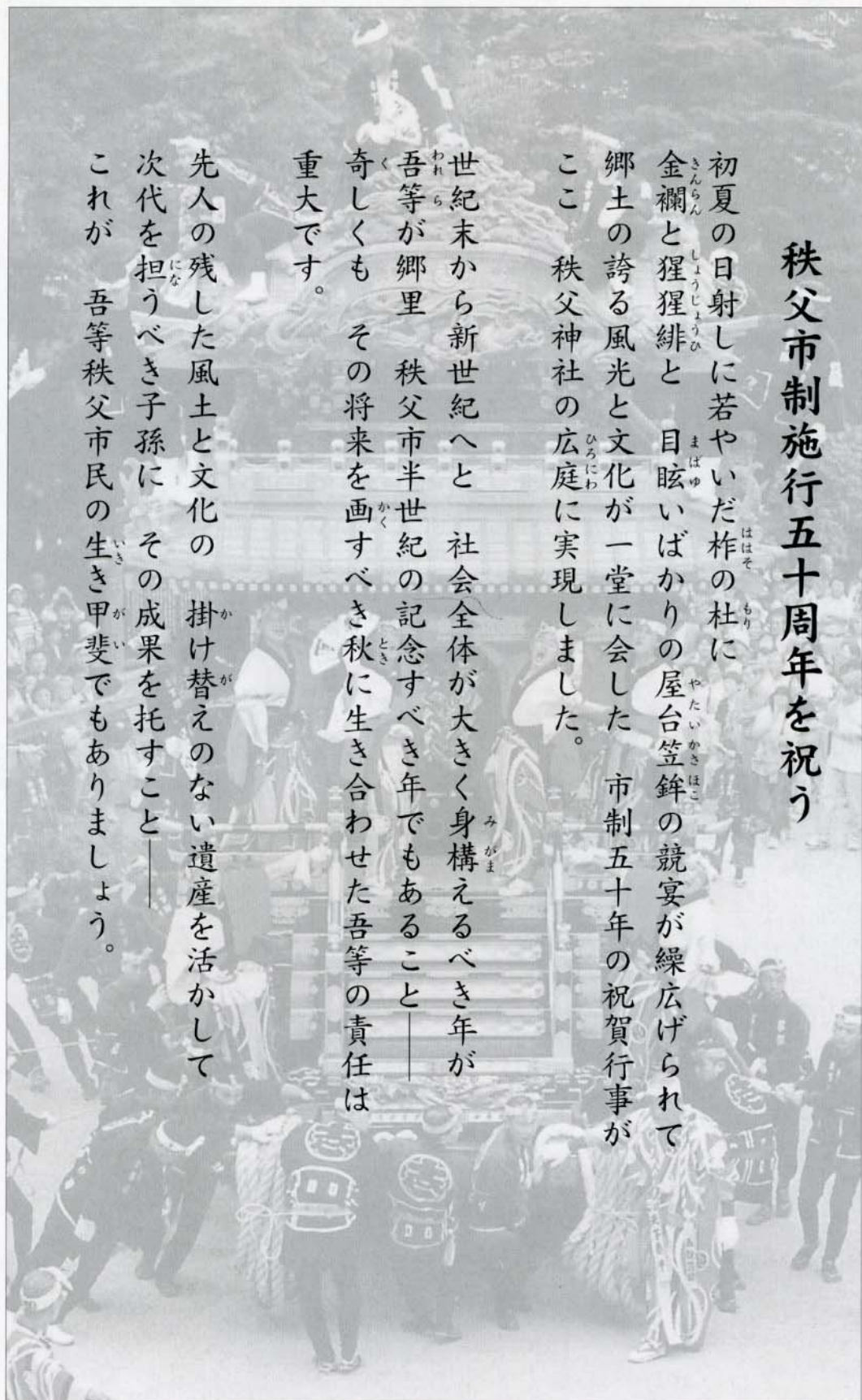
うぶすな
土神の
子なるわが胸
躍り来ぬ
祭囃子の
とどろく
聞けは

秩父市制施行五十周年を祝う

初夏の日射しに若やいだ杵の杜に
金襴と猩猩緋と 目眩いばかりの屋台笠鉾の競宴が繰広げられて
郷土の誇る風光と文化が一堂に会した 市制五十年の祝賀行事が
ここ 秩父神社の広庭に実現しました。

世紀末から新世紀へと 社会全体が大きく身構えるべき年が
吾等が郷里 秩父市半世紀の記念すべき年でもあること——
奇しくも その将来を画すべき秋に生き合わせた吾等の責任は
重大です。

先人の残した風土と文化の 掛け替えない遺産を活かして
次代を担うべき子孫に その成果を托すこと——
これが 吾等秩父市民の生き甲斐でもありましょう。



解説 秩父神社 (20)

彩の国名工芸会々長

坂本才一郎

◆秩父神社社殿

災害復旧工事覚書 (9)

秩父神社の石経

昭和四十三年九月（三十二年前）御本殿の解体が完了したので、当時の地鎮の儀式の概要をつかむため発掘調査をした。



柞の杜の大けやき

その調査前に文献をしらべると、地鎮祭とは地を鎮める祭で、地中に金銀等の宝物を埋めて地の神を祭祀する儀式である。

阿闍梨（弟子を教授しその規則規範たる師をいう）は先ず東南角より西北角に向かつて縄をひき固定し、柱を離れること四指、次に東北角より西南角に向かつて縄をひき固定し、中央の縄の交える点を白粉にて正しく地上にしるし、之を中心に深さ一肘の穴を掘り、更に四隅にも穴を掘る。阿闍梨は大日及び地天の真言、各百遍を誦して之を加持し、弟子三人は中央の穴を掘り、輪法、七宝をおさめた瓶、五穀を埋納する。更に四隅に穴を掘り輪法に鎮供を埋納し、それぞれ穴の上には五色の小石を五個配列する。

七宝とは金、銀、真珠、珊瑚、琥珀、水晶、瑠璃である。五穀は大麦、小麦、稲穀、小豆、胡麻である。此等の記事を参考にして、神社の権禰宜浅見太郎氏が立合のもとに発掘調査を実施した。中央の穴から長さ35センチメートル、径10センチメートルの竹筒の表面に、すきまなく藁縄をまいた筒がでてきた。この筒は五穀をつめた筒であったが、七宝の入った筒は一品も発見されなかったので作業の人達も落胆していた。

しかし、その作業をしているうちに、扁平な白い石にお経が書かれてある経石

を発見、全員で表土をかきわけ大小五十個の経石を採集した。

経文には大きな石の表裏に百五十文字の文字があるが、判読できたのはその約半分であった。

修理事務の糸永君が「南無妙見大菩薩口鑑不味慈徳愛是菩薩口義口妙適悦清浄句義是菩薩」の経文の一部を発見したので、妙見宮のために調製された石経であることが明瞭になった。

しかし、経の題名が不明にて閉口し、

もはや専門家に依頼するより方法がなく、石経の写真や調査資料を持って、日野沢の大通院住職・大久保賢瑞先生に依頼した。二週間後大久保先生が修理事務所においてになり、先日の石経は大般若経の中の理趣分経であると教えていただき安堵した。それは石経の見学の方から、この経は何という経ですかと聞かれても、

「土の中からでてきて日が浅いので名前がわかっておりません。専門の先生が調査中ですから。」と答えていたが、それが明瞭になり私も気持ち明るくなった。

大般若経は六百巻で、その中の五七八巻が理趣分経である。理趣経は正式には大乗金剛不空真実三摩耶経般若波羅密理趣経と称し、略して般若理趣経、単に理趣経とよんでいるが、真言宗の開祖弘法



石 経

大師空海や天台宗の開祖伝教大師最澄などが招来した理趣経を中世に開板したものを理趣分経とよんでいる。秩父神社の御本殿の地下から理趣分経の石経がでるなど全く予想していなかったのに驚いた。また東京から書道の先生がおいでになり「石経を御覧になり、「石には筆がのらず書きにくいものです。この経文は小さな字を整然とならべ、少しのみだれがなく気品があり、吾々凡人のできるものではありません。貴重な石経ですから大切に扱って下さい」といわれたので、益々石経の貴重性を強く確認すると共に、往時の人達が般若経の中でも重要な理趣分経を石に写し、社殿の安泰を祈った強い敬虔な信仰を実践した先賢達に最高の賛辞をささげ筆をおく。

なお石経は現本殿の地下3メートルの所に改めて埋納した。

国際化とグローバル化の課題 —市制五十周年の未来を問う

宮 司 蘭 田 稔

一 ミレニアムの変革を控えて

本号でも特集を組みましたように、秩父市は今年めでたく市制施行五十周年を迎え、去る四月十六日の記念式典を皮切りに五月二十七・八日には国指定重要民俗文化財の笠鉾・屋台を特別に展示曳行する奉祝行事が盛大に挙行されるなど、今後とも新発見の小鹿坂遺蹟をめぐる十一月の世界旧石器フォーラムや、西欧ジャポニズムの走りでもある秩父ゆかりのオペラ「みかど」の来年三月公演など数々の記念行事が予定されているようです。本年が、たまたま21世紀を目前にした今世紀最後の年という大きな節目の年でもあり、しかも世界的なIT（情報技術）革命が人類の文明を抜本的に変革せしめつつあって、その意味でも秩父のような小さな地域社会でさえも、従来の発想を捨てて根本からマチづくりのグラウンド・デザインを構築し直す時機を迎えているとおもわれます。

とはいえ、人間の歴史は常に過去を背負いつつ未来を展望して現在を刻むものです。

過去を振り返らずに、いわば根無しの未来ばかりを追い求めるのでは単なる空想に墮するばかりです。そこで、まずわれわれが心すべき根本の課題から私見を申し述べます。

二 文明の普遍性と文化の特殊性

それは、そもそも〈文明〉と〈文化〉の区別に関連して、明治以来の日本人が犯してきた両者の混同ないし取り違えを根本の原因とする現代日本の深刻な精神的混迷と、近年しきりに推奨される〈国際化〉と〈グローバル化〉への対処のしかたについてなのです。

詳しくは語れませんが、本稿の論法上ひとまず〈文明〉を〈物質文明〉に限定し、他方の〈文化〉を〈精神文化〉として話をすすめていくことにします。つまり〈文明〉は本来普遍的なもので、物質的に生活を豊かにし便利にする高度な文明であれば、〈文化〉の違いを超えて世界的に普及するのです。たとえば文明の利器である機械は、兵器をはじめラジオ、テレビ、携帯電話、コンピュータなど科学技術の先進地から後進地へ、地域や民族、言語や宗教の違いをおかまいなしに専ら市場の原理で未開から文明へと世界中に普及するものですが、これが、いわゆる文明の〈世界化ないし地球化〉グローバルイゼーションというものです。

ところが〈文化〉とは、本来歴史的に宿命のもの、特殊なものの個性的なもので、限定された地域や風土、民族や国家などに固有の生活文化であります。たとえば日本人という民族は、先史時代からこの日本列島に土着した人々が世代を重ねて住みつづけるうちに、日本語という固有の言語のもとに社会を営み、独自の歴史を歩み、共通の風俗習慣や芸術や宗教を営んで、なによりも内面化した感性や精神文化を共有し継承して、日本人なりの生きがいや心の豊かさにしてきたのです。いうまでもなく、先史古代から中国大陸や朝鮮半島から多くの渡来人を受け入れ、進んだ文明や文化を取り入れながらも、永い歴史の中に日本化しつづけてきた成果が、現代にわれわれの誇るべき日本文化なのです。

ですから〈文化〉というものは、〈文明〉と違って便利だから取り替えた、古いから捨てたりといった手軽な性質のものではない。たとえば伝統と革新というふうに、それこそ世代ごとに真剣で時には命懸けで継承されるほど、人生の生きがいや自負にかかわる体のもので、今ふうに言えば、〈文化〉とは人のアイデンティティ（自己確証）を支えるものなのです。我が文化を見失うことは、ひつきよう我が社会の混迷にほかなりません。

三 〈文明〉と〈文化〉の取り違え

さて、それでは現代の日本社会の、特に人心の深刻な混迷は何に起因するのか。それには、たくさんの遠因、近因の複雑な絡み合いを考慮せねばなりません。

しかしながら、敢えて根本原因のひとつを挙げるとすれば、それが日本近

代化の光と影の、その影の部分、すなわち「文明開化」における「文明」と「文化」の混同ないし取り違えなのではないか。

日本は、明治維新において西欧列強の圧力に対抗して独立を守りとおすために、思い切った文明開化をすすめ、西欧の制度や文物をほぼ全面的に採り入れることで一挙に国家社会の近代化をはかろうとしました。それまで約一千年のあいだ中国など東洋の制度文物を目標にしてきた文明のあり方をあっさり切り捨てて、まったく異質の西欧文明を全面的に移植しようとしたのです。そのおかげで日本はわずか五十年ほどで日清・日露の戦争に勝ち抜くなど見事に富国強兵を成し遂げたばかりか、その余勢を駆って西欧列強の帝国主義を追隨し第二次世界大戦に手痛い敗北を喫したことは、われわれの未だ記憶に生々しい歴史です。しかしその敗戦後は、またさらに徹底した社会の欧米化をもって、今度はやはりたつた五十年で世界の経済大国にのしあがったが、その挙げ句にこの十年のあいだ未曾有の経済不況と深刻な人心の混乱に苦しみ抜いているところです。

こうした二度にわたる挫折の依つて来たる根本の原因は、そもそも明治以来の近代化において西欧文明ばかりか西欧文化をもなり構わず取り込んで、いわば日本文化に根ざすべき日本人が日本文化を捨てて西洋人になろうとして、結局は失敗したのです。昭和二十年以来の戦後は、さらにアメリカ文明を金科玉条にして日本の文明ばかりか日本の文化までをアメリカ化しようとしてきた。いいかえれば、今や米国流グローバル化に屈伏するばかりか、文化のアメリカ化さえもこれを時流の国際化と勘違いして、かけがいのない日本文化をながしに捨てた。日本人の血肉となるべき民族文化に無知無頓着な欧米風似非文化人ばかりが横行するようになって、いわば生活文化の喪失と教育文化の混乱とのつげが今になって人心の荒廃をもたらしているのではないか。

結び 文化の「国際化」と文明の「グローバル化」

しよせん自国文化は捨てきれぬ民族の個性であつてみれば、世界に通用する真の「国際化」とは、インター・ナショナル、つまり彼我の民族文化がそれぞれ個性を発揮し合つてこそ成り立つ協力関係のことなのです。つまり文明のグローバル化とは裏はらに、「国際化」とは個性的な異文化どうしの

相互理解や相互協力をすすめることです。から、むしろ我が民族文化の主体的継承こそが本物の国際交流に不可欠な条件ということになります。いわゆる「国際化」と「グローバル化」とは、共に21世紀の人類社会に不可避の大きな潮流です。この際、秩父のように小さな地方社会といえども、しっかりと見極めて然るべきは、「グローバル化」はIT革命によっていやおうなしに世界共通の「文明」レベルで対応し適応せねばならないにしても、むしろそれだからこそ「文化」のレベルで、民族や地域社会の歴史風土にしっかりと根ざした個性的創造を主体的に追求することこそが、実は本物の「国際化」を進めることなのです。

「グローバルに考え、ローカルに行動する」には、まずこの見極めが大切でありましょう。

【表紙解説】

今回の表紙は、秩父市制施行五十周年記念行事として秩父夜祭り屋台・笠鉦が去る五月二十七・二十八日の両日特別公開された模様を掲載させて戴きました。

写真を見て戴きますと神社下境内に曳き据えられた下郷・宮地・上町・中町・本町の五町会の屋台・笠鉦が見られます。

記録によれば大正十一年六月二十五日大正天皇第二皇子雍仁親王殿下が目出度く御成年に達し、新しく宮家を創立されることになりました。その宮号が「秩父宮」に決まり、その五ヵ月後の十一月二十六日初めて御来秩された際、下境内に四台の屋台が飾り置かれたと伝わっております。

この度の、市制施行五十周年記念行事において神社下境内に五台の屋台・笠鉦が飾り置きされたことは、史上初めてのことであり、記念行事に相応しい特別公開となりました。なお、中村・近戸の笠鉦が実に七十

【表紙歌解説】

産土神の子なるわが胸躍り来ぬ
祭囃子のとどろく聞けば

この度の表紙の歌は、上町在住の柿堺欣一郎先生の歌集「冬祭」の屋台囃子から掲載させて頂きました。

今回は川瀬夏祭り号であります。市制施行五十周年記念として、表紙写真でもおわかりのように、冬まつりの屋台笠鉦が奉曳されました。

初夏の眩しい木々の緑に冬まつり屋台の鮮やかな緋色が大変美しく映え。そして秩父の町なかに、地を揺るがすほどの千人ダイコのお囃子が響きわたる、季節を問わず「秩父っ子は根っから祭好き」を再確認したしだいであります。



氏子青年会会長 今井祥介

平成十年度総会に於きまして、会員の皆様にご承認をいただいたき、新役員、新体制が発足致しました。本年は市制五十周年、二十世紀最後の年という区切りの年、氏子青年会も創立以来十周年を迎え、新たな十年に向けてのスタートであり歴史の幕開けの年であります。

が、OBの諸先輩方から今後とも引続き事業参加がほしいとの要望が出てまいりましたので、皆様と相談いたしましたところ、協力会という形になり、今秋までには発会したいと思えます。諸先輩の皆様には、ご理解をいただき多数のご参加を、お待ちしております。

又、事業部制を前会長のときから始めましたが、今年度は、事業ごとに担当者を決め、より多くの方々の参加が頂けるよう組織の充実を計りましたので、多くの皆様方のご協力をお願い致します。

氏青の会の目的に「秩父のマチづくり」があります。今迄神社を中心にいろいろな事業を展開してまいりましたが、各地区での各種催しにも積極的に参加していきたいと思いますので、ご通知を頂けたらと思います。本会の活動に際しまして、皆様のご支援ご協力を切にお願ひし、又ご意見ご要望を何なりと伝えて頂くことをお願ひして、新役員を代表してのご挨拶とさせていただきます。



氏子青年会前会長 鈴木建志

平成十年度氏子青年会において、今井新会長の誕生をもつて会長を退任致すことになりました。二期四年間大任を努められました事は、会員の皆様はもとより宮司様は協力職員の皆様、関係各位の皆様方の温かいご支援とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

今井新会長・新役員を中心とする体制が発足し、二十一世紀への橋渡しが出来ますことは誠に喜ばしい次第です。

在任中を振返ってみますと、恒例となりました「観月コンサート」「グランドゴッポ大会」は「神社・まつりに関する勉強会」に加え、広く市民に呼びかけた「献血会」更に「はそくの杜落語会」「絵画展」等々文化事業をも手がける事が出来た。会長就任当初の念願でありました「境内活動」から「秩父のマチ造り」へのちいさな一歩が踏み出せたのではないかと考えます。

一番の思いは、平成の御大典事業でありました新崇徳会館「平成殿」新斎館の竣工記念事業にお手伝いが出来たと云う事です。特にこの事業におきましては大勢の会員の皆様にこの協力を戴き、改めて感謝を申し上げる次第です。

更には、一父神社氏子青年会創立十周年記念事業の数々の行事です。御神門の右側に植樹させて戴きました「しだれ桜」は毎年その桜花を咲かせてくれるでしょう。

最後になりましたが、秩父神社と共に、今井新体制の氏子青年会が益々ご発展されま
す事と、会員の皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げまして退任のご挨拶とさせて戴
きます。

氏子青年会新役員名簿

[illegible]

新人紹介



昭和四十五年九月三十日生まれ
東京都出身
國學院大学文学部
神道学科卒
趣味・散歩・映画・
音楽鑑賞

権禰宜伏見博樹

私は典型的なサラリーマンの家庭で育ちましたため、初対面の人に「出身は」と尋ねられると少々困惑してしまいます。東京で出生後、父親の転動に伴い、仙台、茨城、そして東松山といった具合に各地を転々としたからです。

國學院大學を卒業後、鎌倉の地で神職生活のスタートを切りましたが、学生時代クラスの担任であらせられた蘭田宮司様より御縁を頂き、思い出だめ湘南を後にして、ここ秩父の地を踏ませて戴く事となりました。海に面した街から山々に囲まれた里へと環境の変化もさる事ながら、神職が大勢のお宮から少人数のお宮へと着任当初は戸惑いもありましたが、新天地にしつかり根付き、実り多い人生になりますよう神明奉仕に勤しむ所存です。

氏子崇敬者の方々を始め、地元皆様方の御指導御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

梶だより



◆ 富田 孝大総代就任のこと



平成二年より、柿原雄太郎前奉賛会長から現在の井上久奉賛会長に交代し本年で十年を迎えます。この十年の間に、永く昭和から当社の大総代を務めて戴いた新井一永氏(野坂町)、浅賀政治氏(中町)、柿原雄太郎氏(上野町)がお亡くなりになり、現在井上奉賛会長をはじめ新井一夫氏、松本真一氏、宮前洋一氏、斎藤信介氏の五名の大総代に御尽力を戴いております。

そして、この度新たに横瀬町在住の富田孝氏が大総代に就任しましたことを御報告致します。

富田氏は、昭和三十三年中央大学経済学部を卒業し、昭和四十二年横瀬村議会議員、昭和四十六年横瀬村長、また昭和五十九年には町制施行により横瀬町長に就任。時代が平成に移り、やまとーあーとみゅーじあむ館長、埼玉県林業経営者協会会長、埼玉県町村会長、運輸省運輸政策審議会委員、厚生省年金審議会委員、全国町村会常任理事と各方面にご活躍され、平成十一年横瀬町長を退職、そしてこの度当社の大総代としてご尽力を戴くことになりました。

また、富田家は当社恒例行事の一つである神饌田御田植祭の神饌田を奉納・管理して戴き、十二月の新穀奉獻祭において、その神饌田で収穫されたお米を当主である富田氏自ら大前に奉奠して戴いております。大変、縁の深い富田氏のこの度の大総代就任は、秩父神社が知々夫國の総社であることから、秩父一円・郡部を代表としての就任でもございます。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

◆ 宮司ベルリン

国際会議に参加



蘭田宮司は去る五月六日渡欧、翌七日より三日間のベルリン会議に出席し、帰途ノルウェーの首都オスロ市に立ち寄って十四日に無事帰国しました。「宗教と寛容」という主題でキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教の各代表と共に、宮司は神道を代表して神仏共存の日本宗教の伝統を紹介しつつ、排他的な一神教の独善性が生み勝ちな不寛容を克服する宗教文化のあり方について提言してきました。世界に頻発する民族・宗教紛争を未然に防ぐ手立てとして神仏協力の範を示すことが必要とのことでありました。

◆ ははそのもり美術展のこと

平成十二年五月二〇日〜六月十八日までの期間平成殿二階において、秩父市制五〇周年記念第一回ははそのもり美術展が開催されました。

美術展には、郷土秩父を代表する洋画家、浅見嘉正先生、大野登先生、近藤壽一郎先生お三方の近年の力作を出展して戴きました。

また、浅見先生は「武甲山春雪」、大野先生は「奥秩父錦秋」そして近藤先生は「待春」と郷土秩父の美しい風景を描かれた大作を当社に奉納して戴き平成殿に常時展示し、秩父を訪れる多くの参拝者の方々に大変喜ばれております。なかなか普段見ることが出来ない諸先生方の作品を一堂に企画致しましたこの度の作品展。次回、第三回とどうぞご期待ください。



◆ 秩父神社妙見講

自平成十二年二月至平成十二年六月

- 二月二十日 宮側講
長谷川正雄講元外九十名
- 四月二十五日 皆野妙見講
豊田スエ講元外三百四十名
- 四月三十日 近戸講
市川信雄講元外百六十八名
- 五月一日 上野田妙見講
前原太郎講元外四十八名
- 五月六日 原谷講
堀口喜市講元外四百九十六名
- 五月七日 中宮地講
高野文吉講元外二百四十名
- 五月二十四日 幸手妙見講
大久保利一講元外五十名
- 六月四日 別所講
石川直幸講元外百八名
- 六月十一日 下宮地講
根岸恒太郎講元外八十名
- 六月十二日 川越終講
横山 功講元外十四名
- 六月十七日 日野田妙見講
荒船啓介講元外二百四十二名
- 六月十七日 本町講
大島孝子講元外二百一十一名
- 六月十八日 熊木講
加藤正二講元外二百六十六名
- 六月二十五日 下郷講
島田源作講元外四百八十名

◆ 職員辞令

実習生 柳田 耕史 主典を命ず
巫女見習 飯田 善子 巫女を命ず
伏見 博樹 権禰宜を命ず
(四月一日付)

秩父市制施行
五十周年記念

簗鉦・屋台特別公開

本年は、秩父に市制が敷かれてから五十年を数えます。折しも、市ではキャラクター「チブー」の発表・石器フォーラム・秩父歌舞伎公開・ふるさと切手「秩父夜祭」発行など様々な事業を計画し、すでに一部は実行されています。そして、その一環として、去る五月二十七日・二十八日の両日、当社夜祭りに曳行される簗鉦・屋台が特別公開されました。

このうち、簗鉦は中近・下郷の二台、屋台は宮地・上町・中町・本町から出された四台であります。いずれも国の重要民俗文化財に指定されていますが、特に中近の簗鉦が、十二年ぶりに花笠で飾った本来の姿で市内を曳行されたことは注目に値します。

二十七日午後、秩父鉄道秩父駅前に据え置かれた中近簗鉦を除き、各町内の収蔵庫を出発した簗鉦・屋台は続々と神社に集結。神社周辺で一斉に行われた「千人太鼓」の地響きのような轟きは、その雰囲気をも盛り上げました。

当社でもこの佳節を祝すべく午後六時より臨時奉祝祭を斎行。続く直会も合わせ、内田市長以下各



町内会長・特別崇敬者など多くの人々が参列し、喜びを分かち合いました。

残念なことは、夕刻から雨天となったため、予定されていた境内での屋台所作行事は取りやめとなり、一夜飾り置きとなる下郷の簗鉦・境内に収蔵庫がある本町屋台を除いては、やむなく各町内に戻ったことです。

明けて二十八日、天候に恵まれたこの日、あらためて各屋台が神社に集結。折からの参拝者・観光客で、境内はあふれんばかりでありました。

午前十一時過ぎ、平成殿前において、市主催のセレモニーを挙行。鈴木県副知事をはじめ、井原与野市長・小澤草加市長・山口行田市長・斎藤所沢市長・三枝春日部市長・田中久喜市長・高瀬加須市長・茂木本庄市長、更には石田犬山市市長の参列の下、内田秩父市長の挨拶にはじまり、鈴木副知事からは、土屋知事の祝辞をいただいております。

午後になり、境内の簗鉦・屋台は市内の牽引へと繰り出し、代わって秩父駅前に据え置かれていた中近の簗鉦が進入。花笠を揺らしながら、天に響えるように引かれる簗鉦の姿は、圧巻の一言につきます。

中近の簗鉦は、この晩は境内にて停留。その脇では神楽殿で奉奏される神楽の中、興奮気味やらぬ人々がいつまでもお祭り気分に浸っていたことでした。



蘭田建・つぼみさん結婚報告

さつき晴れの五月二十九日、蘭田稔宮司のご子息建（たけ）さんが、つぼみさん（旧姓木村）と大前にて神前結婚式を執り行いました。ご媒酌人は、当社奉賛会長・井上久ご夫妻でした。披露宴は、集殿二階の神の間に、また二次会は、氏子青年会を中心に、平成殿一階ロビーホールで盛大に催されました。

建さんは、昭和四十七年、宮司ご夫妻の長男として生を受け、國學院大学卒業後さらに二年ほど森林保全を学んでから、平成十年より鎌倉の鶴岡八幡宮に奉職しています。

つぼみさんは、昭和五十年、木村浩巳・久美子ご夫妻の次女として藤沢市に誕生。おもに鎌倉で育ちましたが、早くも十五歳でイタリヤに単身留学するなど非常に行動的な方です。料理が好きで日大短期大学部で栄養士の資格を得た後は、園芸にも興味を持ち、北海道の農業専門学校で、農業も学んでいます。因みに、剣道二段の腕前でもあります。平成十一年、鶴岡八幡宮に正月の神女助勤として奉仕



した折、建さんと出会いました。将来、秩父神社を背負って行くお二人です。八幡宮で穩りある神職の修養を積みつつ、素晴らしい家庭を築かれることを期待します。

編集後記

■ここに社報「柞乃杜」第二十一号をお届け致します。

■先の平成十二年六月十六日午後四時四十六分、皇太后さまにおかれましては、吹上大宮御所において老衰のため崩御あらせられました。九十七歳という歴代皇后のなかでも最も長寿であらせられました。

■昭和四十二年十月二十五日、二十六日の両日にわたり、埼玉国体秋季大会開催にあたり昭和天皇陛下と御一緒に大会御視察のため初めて秩父に行幸遊ばされたことが思い出されます。

平成殿二階展示ホールには、その折り秩父の秋の散策に貴船菊が咲き揃う武甲山の裏参道をお歩きになれるお二人のお姿が写真に収められております。

■「日本の母」の象徴のような、皇太后さまのあのやさしい笑顔。もう二度と拝見することは叶いませんが、わたしたちの心のなかに、いつまでもお日さまのように輝き続けておられます。

※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100の再生紙を使用しています。



平成十二年（二〇〇）七月二十日
編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所
〒368-0401 埼玉県秩父市番場町一〇一
TEL 〇四九四 二二一〇二六二
FAX 〇四九四 二四一五五九六
印刷所 株式会社印刷所
〒368-0402 秩父市東町二七一八